杖の節

全

858
68

国立国会図書館　タイトル『杖の節』　請求記号 858-68

ガラス使用

858-68

叙

萬、双、一ヨリ發リ有リ双ヒ一ヨリ

究ム豈是一毫窓裡、桀

馮然トシテ燈火不ル絶連々トメ桃

李生レ實ヲ風歌滑稽長

国立国会図書館　タイトル『杖の節』　請求記号 858-68
ガラス使用

家翁既六十一頽還暦
慶呼鳴唐數更不可
量哉　春林舎　嘉江

于時享和二年
壬戌春花朝

叙

杖の節

人生の寿
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『杖の節』　請求記号 858-68
ガラス使用

齡をいとふ人あらば
ものやいあるる
壬戌孟春　白雲人義孝識

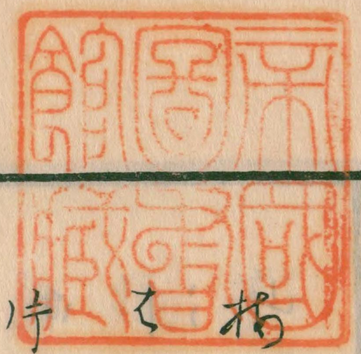
栗林三星堂

春の
ふり
種を
浸す

一茶庵丈龍六十一齡

国立国会図書館　タイトル『杖の節』　請求記号 858-68
ガラス使用

一無菴丈龙の
還暦の慶を
杖竹に節か
いく春さ色し抜之よ
御



茶一泡　丈龙
枯り渋を此流　森江
人なつかしさ〜の海苔はきて
序ながら一言　暮竹
夕月よりも出永のあかせ　南陽
雪岸に別れの秋　東鳥
意庵の夢見ぬさきに花さき　南暁
立木四五本薙倒し　江
改造戸に柴火新色風山かつ　鳥

夙うゆをれ車やゐ出次
陽

かゑ雪のゆくゝ三峯岸北ゆく
竹

ゆくこゝたゝゝの髪雪して
曉

立かゝゐ簾を駅くゝ之ケの月
龙

萩おゝ年なゝ打て呉ゝ風
鳥

向菌うゝ志ゝゝ竹ゝ秋乃風
江

ゝすゐ歩ゐくゝ中後一牧
竹

山岸れ花出白う西日さゝ
鳥

菜種斜う尾ふくゝもの
龙

猿蓑のおゝこ猫脊う年よゐて
曉

盃つゝゝゝ中ゝ
江

ゝら〳〵ゝゝゝ音国へ
竹

ゑんなゝちゐ乃居
陽

ゝ消やすゝ燭のさきく一〳〵秋
鳥

丞う佛を抱うゝすゝ
曉

骨高う女の衣をゝ
龙

さみを社除を関の　秋霧　竹

木下り閑を月なき秋ゝ仍て　江

弓切茂れ神を鳥　神　鳥

おつゝとと深し素袍の大和ゝし　陽

搭のゝゝ星を翠の翔り　龍

二三束かゝけよもゝ原青松葉　暁

もゝ〳〵　条のいとき弱腰　江

附かつゝわいほ久も那く　取寄し　竹

あゝしのさゝゝ雲をぬゝ　暁

うち自ふ其の花の花のさうな　陽

毒をさゝ絡れいとゝ延やう　竹

右孔仙ち路

賀章

各略前書

花鳥と隔ぬ童さゝ絡ゝ　伊勢津　孔雀

世後をいく十ゝえて松乃春　伊達　竹冠

月毛の種馬ふとり新し　東鳥

坊の齢はるのゝ遊ぶまゝと　敦賀　尭曦

おれの子やゝ子ゝかゝる加や　林亭

ぢうかえるまや　西湖舟木　獅丸

推う賽を　神乃春　官龍子

子仙は一あそうを拾ふし　若田川　五蓮

そまうの子ひうの代の春　ハリヽ　栗下坊

鶯の耳かしをきをぬう譲き　伊勢松崎　豆左

是仙を花ういく春ゑき人　百貫

拾ふし根を忘鳥れ老木ゝ　尤涯

六日年哉て答ぬ拾乃忘　魯竹

根つゝせて千世を見の人小松川　百池

ひゝろ子を拾の者ゝ　城南　風尤

月毛れ雲吸人れ齢ふ忘、便路

抽き出て既うたゝの芽枝ぶり　烏虹

いくゝせの後形太き若ゝ星　湖南　虎風

雲霧ゝ　老木に花の新し　南睦

著萩の若葉ゆか之原勢ひ　東都　春蟻

又来ゝ世ゝ若やぎ若花乃春　上毛　百童

岩盤木の色めき若ゝ里、帰寳

六十一さし　菜やゝ代ゝとまの雀、　親思

たゝゝの姿や花ゝ千ゝの春、　霧龍

世ゝ歩一原老や若の色ゝ鳥、　泯山

々ゝ枝長ゝ折ゆひてさゝゝ人、　瑩陌

、

是ゝうゝゝ春ゝ春ゝ松乃花　イセ山内　丘高

千ゝせ孫原ゝあゝ色乃一ゝ宗　投路

、

みゝゝ世ゝ老ての後乃若柳　関丈子

月花ういく所 この えせ六十一ヲ 桃江

ゆゝ春よいつゝを学の若 この正し 花僊

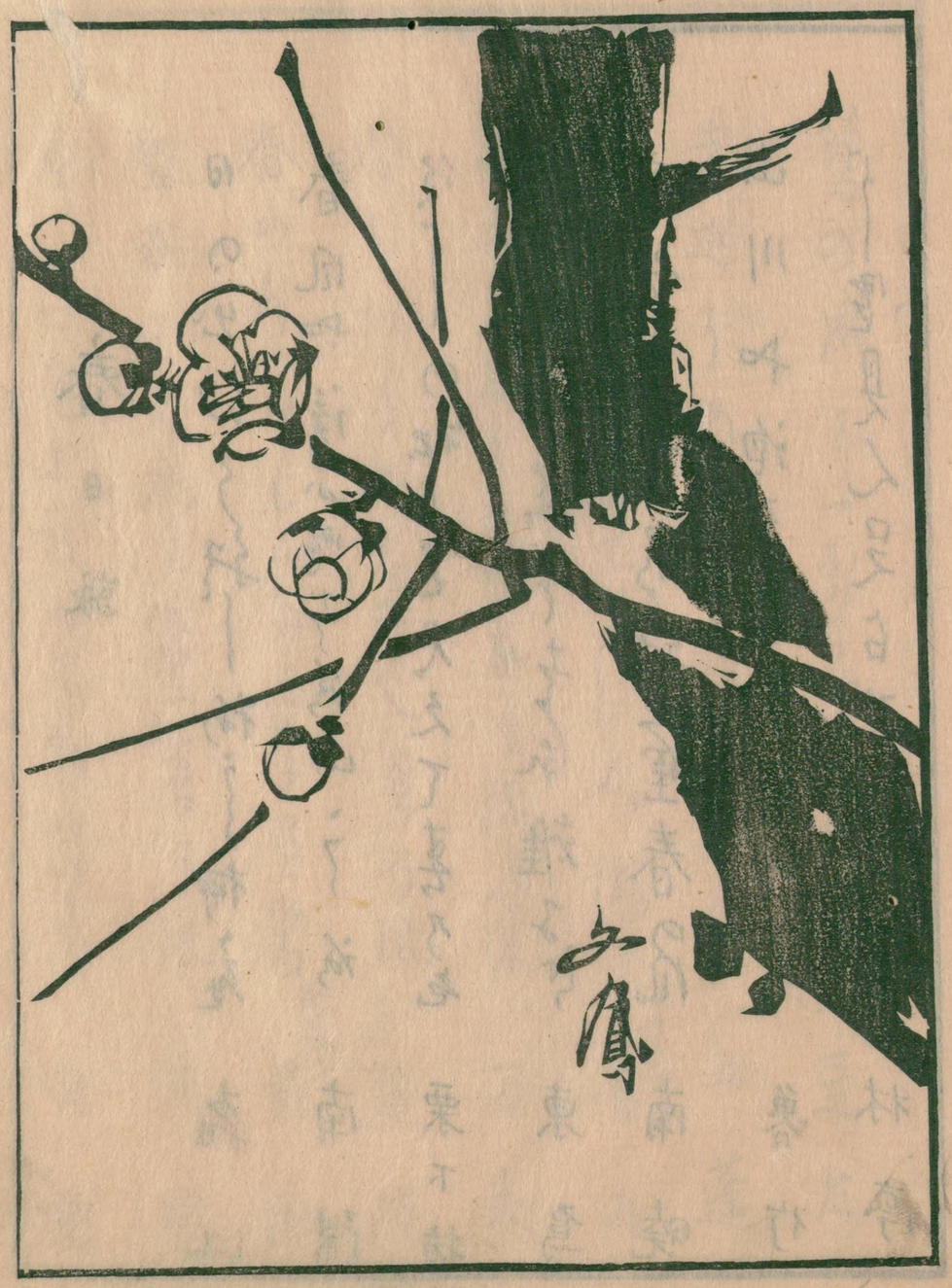
雅ゝ也を見かえ里て恋の春 宗之

木くの芽を喰ひ叟ゝ寿 在京 南陽

去る諸君より恵れ賀詠

十よ一二ヶ峯 余が後編著

謝せ而已爰に略之



国立国会図書館　タイトル『杖の節』　請求記号 858-68

ガラス使用

春日詠

日の出汐うすれ〳〵柳うゝ柳うゝ　乗江

春風や淡山〻うゝ　南陽

俗うゝの松うゝ尺えて吉乃色　栗下坊

凡立て巣ふ吉ふ雄うゝ　東鳥

市うゝ社寺ふ紙うゝ里春の風　南暁

山川や泡うゝふ春の水　魯竹

うゝ里見人足古せうや春の宵　林亭

鶯の風うゝ彩吉てけぬ　豆左

吉を近うゝ紙ふ白ふ柳うゝ乳、五蓮

春風や就見て来人陸る　青尾

吉の水面を吉流吉里、万来

浴を松うゝ摺火ふうゝ吉乃風、亀陸

春の水かけも日南も方うゝ　素郎

竪横うゝ人庵ふ里吉乃風　未芳

寄一口尾上我々足紙うゝ　月更

霧ふかし雨もあゝ秋もあるとあと　玉汀

忘れ捨ひてふかふ明柳鳥虹

人りよ西も東も忘れ春素十

陽炎に鶯の鳴きし花さし　西湖舟水　九花

春は雲二日見ふ里宮山、詠史

ふゝまれ白し此方浦の松、獅丸

猿蓑に小笠斜の夕日うれ　伊達竹冠

雨あゝ秋柳の上の夜ハ晴ゐ、見車

袖さゝ〳〵味うりけを松の月　魯雪

山かけや雲おく居の赤椿　丈尤

月の松指りあいまをもて余才　魯齋（イセウヒミ野）

春の山又来人ゝ張部ケ多里、右存

旅篭のたい〳〵けや春の風、月叟

春風や松ふ〳〵伊勢の浮、可涼

あゝ〳〵ふ色香こもを丁朧月　雲屑

春風の杖う障子て通ひ竹　西湖　玉翠

菜賣来て妻のかろそ一言　甲斐　方吾

春の月誰ゝ来すも垣一重　兵庫　秋湖

ゆ梅う余寥の釣ね　南部　調鼓

雀子や宮ち人ゝ神ゝ上、梨　同

鶯や京ゆ来て君保州ゝて　仙臺　白人

梅をてうき世めゆ原来ゝ　イセ　聽雨

洞くゆき人とわう釣て春ゝ風　上毛　紫陌

眠ゝ舟を柳う高ゆ里、霞龍

鴛鴦の濤色ゆう春ゝ水、鰓思

貝ゆゝの小山ゆ原柳ゆ、微風

柴舟う濡ゝ舟す人来ゆ　信州　伯先社

ゆゝて臘くも梅の春ゆ丈龙

書柳う濡ゝ三日の新　三千丈

菊あり松も交り春の草　大江丸

庵さを後を見やり柳すれ　定雅

小出し鶯の新む色の苔　百池

青柳や二渡り成し立流し　貞士

正月のぬり引ものを月板の角　可加里

たそ寄松の木代間の柳ゆ　呂蛤

春雨の下り小や隅田川　春蟻

小疱のめてをきき神郎梅の京　泰渓

四もてを小菜もゝ屋夕雲　長齋

七草の汁の滴を出いと柳　千載堂丈士

ふるめ梅見ゝあり人待の童　學

筆筥のいゝゝ脇を分て

物り君托て鐘おゝ消し春の雪　挑江

早天之風色

ゝ小やなこう托明を風淀を里　魯竹

望月花ゝ月見て梅ゝ流ん水　丈龙

友とちらしたつひとおく
乱れ伏す

手の乱れ乱れつめたるし杖の恋　南陽

汨津　柏水し神夢を
筆のそこ

御
元日を杖の上なる朝　白一の恋

杖の東　風ふく子良　飯乃西　柏水

春ふかしとなる沙の岩　丈九

恋おせて志き里の杖の白し一の那　虎鳳

杖の下風あるけなる風白し　城南下方

四五本ふく柳　そよ〳〵　鈴の音　雅

杖〳〵よ小石無ぬ春乃庭　真二本松　調

、

明かの春と成る風　柳　イセ　丘　高

春の日も柳〳〵成る里〳〵不及

二三輪山の上なる風　野杖〳〵東戸

春風の人〳〵ひ一の山〳〵四　渓

鶯はふいて鳴さる春の月　後水

さしやうはくわりやまとん春の月　西湖 湖音

さらしとる菜洗ふや流れ川　姫路 佳雀

今暮て今見る月や梅の上　粟堂

予が母若かりし時の形見ともなる
ころもをつゝみおきけるが年頃も去年の
秋としのびくいやつるをも見て　みまかりけり
割も首にかけしみとしころの果のなん仰れ
うきにいきおしみて如何せけりぬる
ぬるゝきて

月の影や御とるき梅白き　上州 紫陌

春もきよを連歌に暮て茶飯かな　帰寧

春雨に発句もなき紀の寺男　泯山

正月の雨や笠井は青菜売　洲石連

竹に木に風雨なくし春の月　仝

春風は松に吹よる夕かな　大和五條余連 枕酔

てらくや津日も花の裏に有　さと春

人喰て咲に花を暮に夕里　子来

菜の葉や蝶も有うぶかしたり　一鳥

如月やおしき移りの作て居　金洲

、

江の上や二人志て折柳の恋　名古屋　士朗

眞山をさゝらを春の小口哉　羅城

ついそたう尺拍子押迎ひ　秋田　五明

釣鐘や志ゝ帆二ぬゝ志ゝの海　出羽尾花沢　橘

雨の後山見る春と成ふ窪　イセ四九　坂蓋

ふはゝゝふゝ春の霄来ル　室津　士龍

旦見ゝう志ゝなるゝゝ夕　柳　上州　一奥

裏柳ゝ鶯し山間ゝ入日ゝ影　安達　穐夫

雨て雨ゝ花蓋ハふゝ花柳ゝ恋、冥々

鶯柳ゝかきさゝし里春のゝ雲秀

つゝゝゝ濡ゝ雨の戸ふ庵　河内　八千里

けふ春の春のゝ後ゝ二日ゝ　上毛　岩白

雲竜の鶯うたうし春の風　一会庵

国立国会図書館　タイトル『杖の節』　請求記号 858-68
ガラス使用

一五宗祖の卦を賀して

ゆきてものくせや延せれ中の糸　八千里

此後を恙よ打殺名のさく　有化

洛東長樂寺の春日いとめてこのまき

ちるはうつ讽ひうあるを弱舞ら

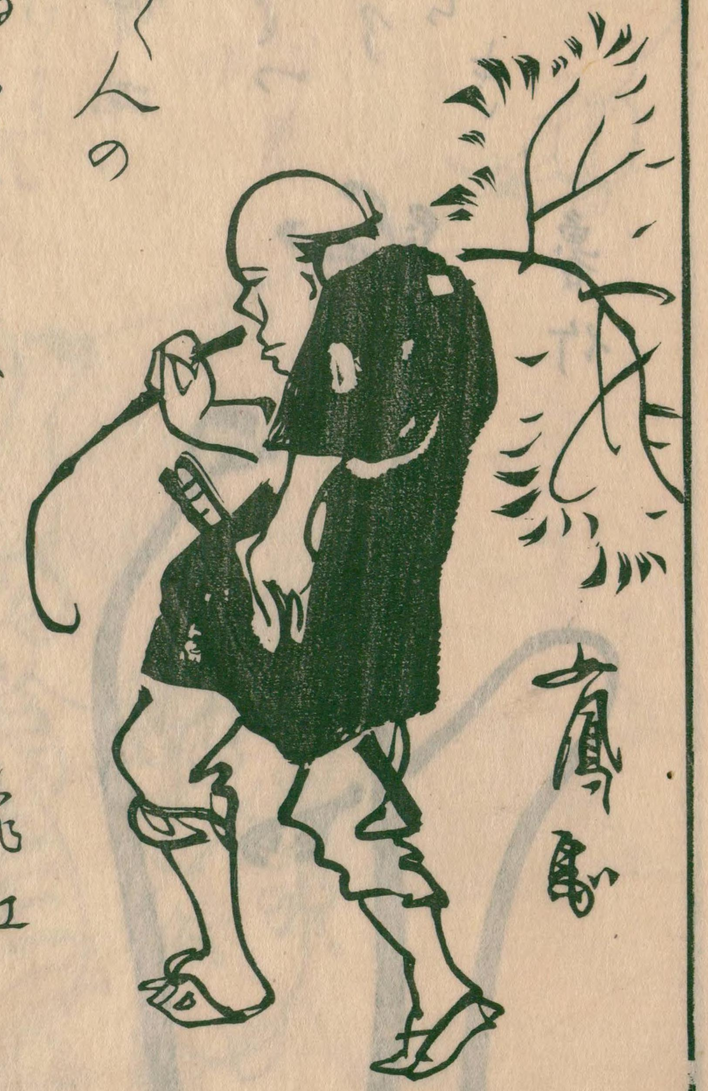
かくく故女艶女の長寿ふ寿〳〵梅を

さハかしめこなるハ各〳〵毫を探て訪へ

を的人句樂り昏を与ける

ふいて才花ものいくれおや紙文　一五庵

醉人のゆ玉里ゆ　しさらふ　魯竹



醉人の

皆ゆよくて

花ゆ鳥

素江

国立国会図書館　タイトル『杖の節』　請求記号 858-68
ガラス使用

図

両

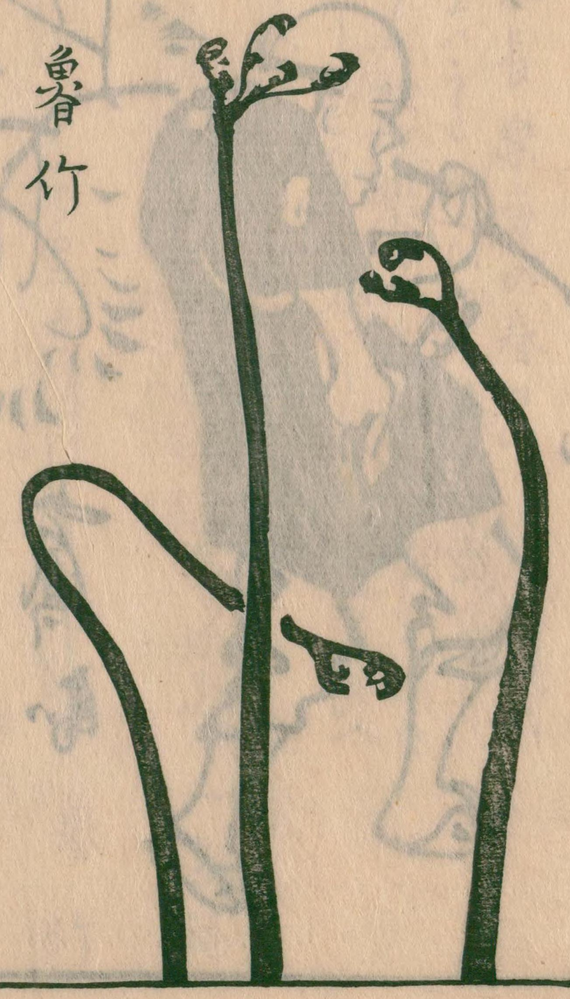
の

伸つ

曲るつ

日々

ちき



魯竹

吹

おろす

柳の

風や

さむらん

豆左

国立国会図書館　タイトル『杖の節』　請求記号 858-68
ガラス使用

春風や
簾一重の
二軒茶屋
南陽

大井川の春色
一茶庵
ひかる
嵐の
橋
のへ
つけ
と

夢覚うつ抜出て宮路より於ゝ既三陌九街きく
さま見え渡りて山院宮陵おの〳〵見めぐる里
板屋の茅屋と和〳〵元楊柳緑々さしていとを
さそふの風情より紅出口の立体しき抜て
うゝ紙しいさしいさしいさきもいさ耳うれ
けまいるもるの芸村蝶夢陵臺周更のれ
さもく故人と成今ハ一三菴のあ〳〵のいか
そうるとうえ孤ゝをうきさきを洲しを浪さ
指揮を風るゝやしけ抜てそいちるとに、
たゝゝと入て

鳥高し北殿も山岩も菴乃雪　露秀

菴主ハ赤ゝ〳〵冥々と管鮑の交あ抜を一抔
ゆて紙衾をも敲せよゝ〳〵ゆゝ〳〵れ
よゝゝゝすしおめゝをもめゝゝゝ
世勢う風雅を失ひゝ
ゝゝきおの丁子沈もたゝれ名〳〵　梦　イセ　楚雀

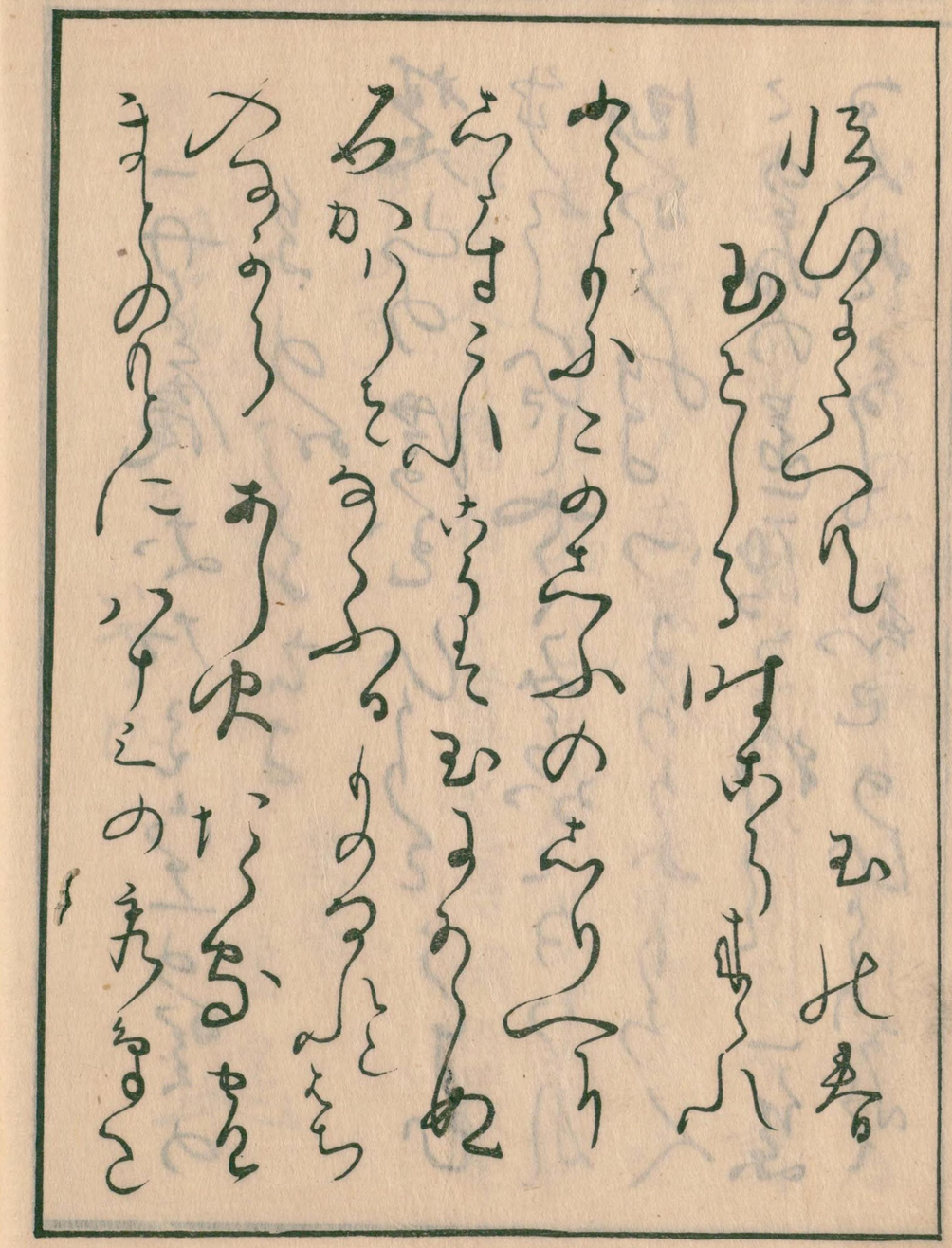
後叙

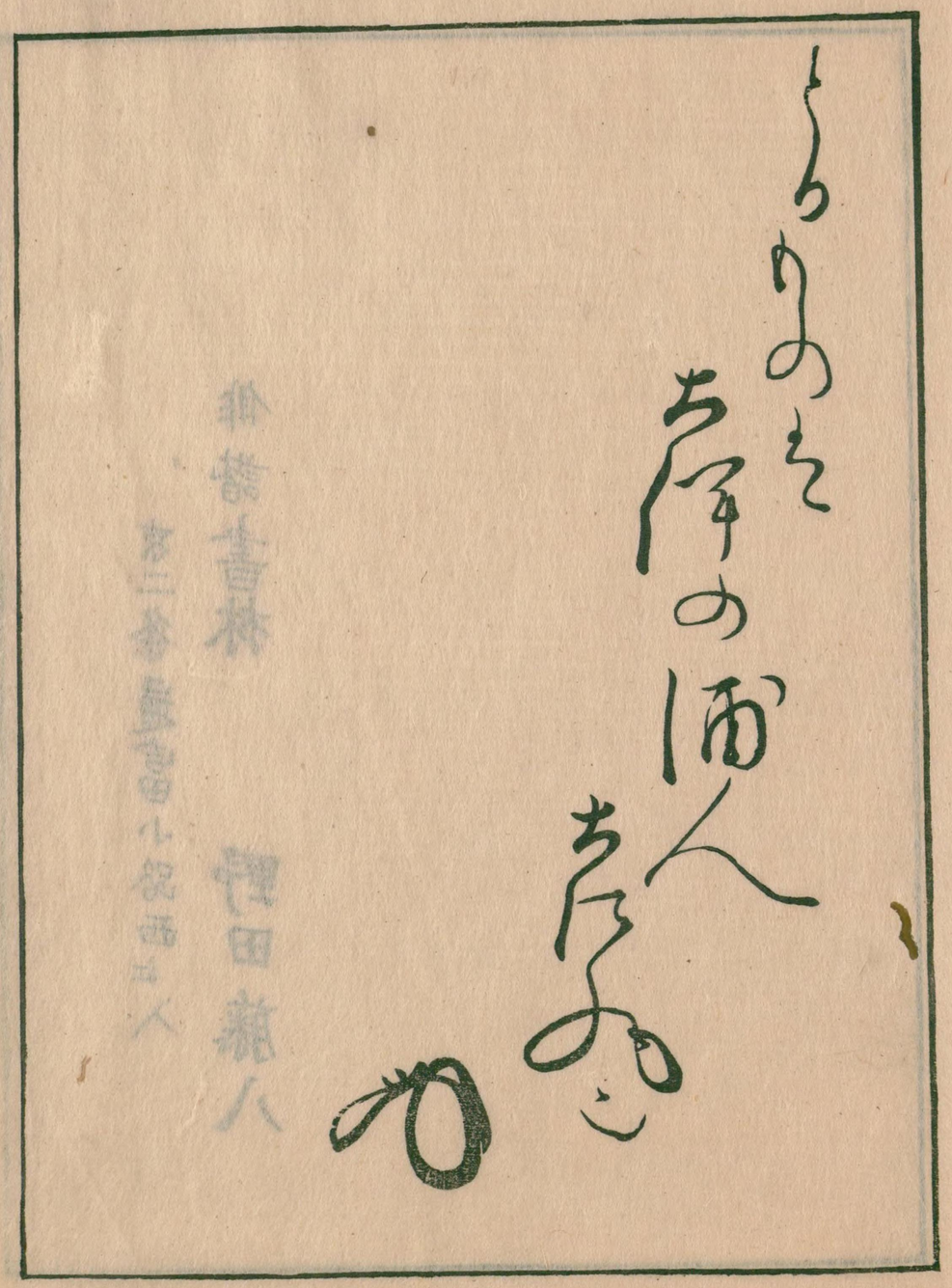
むゝ〳〵或人の春を書くとて云青法印
蓑笠う世を鄙月雪文科人を老
花ハ芳昨乃喜の雲必光を高いとし
成弓浦ハ西上人の哥に世ハ中
住うく者ハ住を成て柴の菴の
志ゝなれ方を自也事故境界う
清地ハ古人の古紅を打う殺思

世間も今の一芸菴主の本卦の賀より
集を乞すとすゝめ序を請
れハ老耳と病眼殆ん盲ゆゑ
忘れ日々に物くさを何せんすべなし
唯古人の糟粕を掌て等閑の罪を
補ふ而已

享和二壬戌年　栗津重孝

一世菴主たを空の壁の
糸のみたすの
楚々の濃もひらをもむ
宇ゆくしやみらかの
四かゝみつゝふりの人
この名の巨唐を移
人ゆゑ名ゆゑ





帝國書林
東京市本郷区西片町十人
理田義人

国立国会図書館　タイトル『杖の節』　請求記号 858-68
ガラス使用

858
68

京二条通富小路西江入
俳諧書林　野田藤八

国立国会図書館　タイトル『杖の節』　請求記号 858-68
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『杖の節』　請求記号 858-68

ガラス使用